

イギリス・イートン校での短期語学研修が行われました（2026.7～8）

本校では、高校1年の夏休みに、短期語学研修として、イギリス（イートン校）、アメリカ（ハーバード大、カリフォルニア州のラ・サール大）、フィリピン（セント・ラ・サール大 このみ中3での参加OK）に希望者を送り出しています。

以下はイートン校に研修に行った高校1年生の手記です。

2026/07/24（金）--少しきつめの香水の匂いがした。そのフルーティーな香りと、壁に貼られている英字のポスターが、僕が今どこにいるかを実感させてくれる。ヒースロー空港。英国に降り立った時にはもう午後で、13時間近いフライトを終えた僕たちの間には期待と倦怠感の入り混じった不思議な風が流れていった。初めて降り立ったこの異国の地の景色一つ一つ----たとえそれが通り過ぎていく小太りな初老の英国人や日本のものよりも体感1.5倍速の動く歩道であっても----が、僕にとっていずれかけがえのないものとなるであろうことを確信していた。

ヒースロー空港の入国審査を通り土産屋の間を抜けて進んでいく。その紳士の国には異様な総勢31名の我々ラ・サール生を出迎えてくれたのはこれからサポートを担当してくれる先生3名と大学生スタッフ3名。並んでいる僕たち一人一人に彼らが順々に話しかける。だがコミュニケーション能力の欠如した我らに残された手段は日本人特有のあいまいな愛想笑いのみであった。

空港から外に出る。日本の感覚では秋に近いような涼しさだ。黄色のけばけばしいパトカーやバス乗り場の警備員にすら海外らしさを感じ懸命に目を凝らす僕たちが、はたから見たら警戒心の薄い外国人観光客であることが一目でわかったであろうことは言うまでもないことである。深い青色のバスが僕たちを迎えにやってくる。そのナンバープレートが英語と数字交じりの一行だけで書いてあるところにどこかエキゾチズム的な美しさを感じ、写真を一枚撮る。

バスに乗り込むとリストバンドが配られた。僕はこれをきつめにつけたせいでこれから二週間外すことができなくなる。左手のリストバンドが、この地で僕たちが何者かを示す印籠となるのだ。

バスでしばらく走る。高速道路をしばらく走り、やがて小さな町についた。自然に囲まれていて、煉瓦造りが美しい。どの建物にも決まって煙突が建っているが、季節柄そこから灰色の煙は見えない。そうした街並みを抜けて、ひととき大きな、しかし煉瓦造りで歴史を感じさせる建物が並んだ場所にたどり着いた。この建物一つ一つが、イートンの校舎や教会である。またその一帯の家々はすべてイートンの「ハウス」と呼ばれる寮だ。合計で430棟ほど、約5.9km²もの敷地を持つイートンの広さに圧倒される。

緑に囲まれた建物のまえに、古びた大砲があった。キャノン・ホールと呼ばれる広場で、クリミア戦争時にロシア軍のものであった大砲だということはこのしばらく後に知ることとなる。

バスを降りてしばらく歩き、僕たちがこれから過ごす宿舎（ハウス）----South Lawnに到着した。歴史を感じさせる煉瓦造りのこの建物は1860年代に建てられたという。4階建てでところどころ蔦がはっていた。

入ってMeeting Roomに案内される。壁にはこのハウスの生徒であったのであろう生徒たちの名前が刻まれた板と、先生たちの全身の絵が数枚かかっていて、小さなアップライトピアノ、そして大きな机が3つと椅子があった。みんな座り先生方の指示を待つ。まず初めに、僕たちに個別識別番号が振られた。僕に与えられた固有の番号は----nineteen（19）。この番号は毎回どこかに行



くにつけて number-off (one から thirty one まで一人ずつ唱えていくという確認) に使われる。僕たちは学生スタッフたちにあおられその速さを極限まで暴走させ、最後には最速 7 秒という偉業を達成した。

そして部屋割りの発表があった。1st floor が 2 階であることを注意しつつ聞く。僕の前の人たちが 1, 2, 3 と部屋が決まって行って、僕の前で 18 まで来て、そして…「54 !」。ん ... ? その後また数字が戻ったのでもしかしたらぼくだけ離れの孤塔のような場所に部屋があるのかと思い緊張したが、実際階段近くの部屋というだけだった。

個室は僕の部屋は 2 重扉で、またどの部屋も窓や寝心地の良いベッド、勉強机、デスクライト、複数の収納棚とクローゼット、コンセントと充実した設備であった。また、部屋の机の上には小旅行の際着ることが義務付けられる赤色のポロシャツ、黒く、金の文字で Eton College と書かれたファイル、これから常に首にかけて出かけなくてはならない自分の名前と番号、そして裏にはハウスの連絡先が書かれた lanyard (名札)。そしてウォーターボトル、カバン、日記帳、イートン校の公式パンフレットがこれから使うものとして置かれていた。特にパンフレットはイートン校に入学する生徒たちが読むであろう物で、まるで本当にこの学校に入学したかのようで嬉しかった。

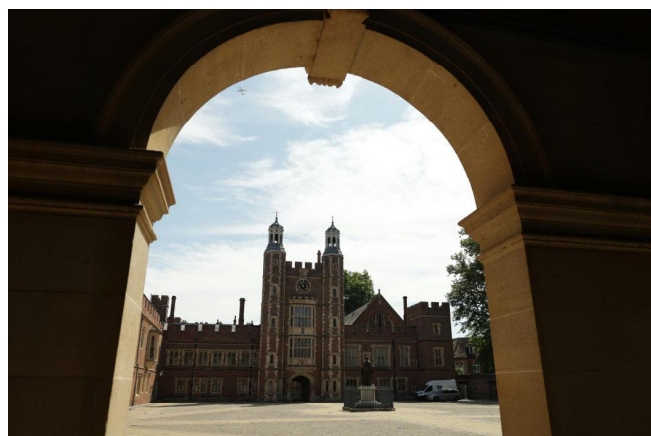
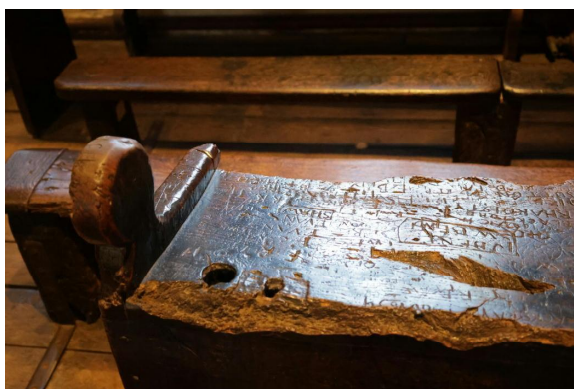
さて、こうして僕たちのイートン生活は始まったわけだが、この 2 週間をすべて文章にまとめるにはあまりに僕たちの生活は充実し過ぎていた---。そこで僕の思う特筆すべきことのみここに記すので、あとは読者の皆さんの想像力で広げてもらいたい。

僕たちの華々しいイートン生活の皮切りはテストである。4 択の穴埋め形式の英語の問題と面接である。

どちらもそこまで難易度が高いわけではなかったが、まだ会って間もないイートンの先生と面接するのは少し緊張した。しかし向こうからラフに話しかけてくれ、日常会話のようにおしゃべりできて楽しかった。そのテストの結果をもとに 10 人ずつのクラスに分けられる。Mr. Bean、Sherlock、Potter という、イギリスの有名キャラクターの名前からとった 3 クラスだ。これからはそのクラスで、少人数で授業を受けることとなる。

日々の授業はイギリスの文化歴史に関する授業、英文法の授業、英会話の授業の 3 種類があり、1 日 3 コマ。

イギリスの文化歴史に関する授業はこれまでのイギリスの王政の流れやイングランド・ウエールズ・スコットランド・アイルランドの違いなどまじめで勉強になるトピックもあれば、イギリスの音楽とテレビについてなど少し面白い講義もあった。英文法の授業では現在進行形や完了形などの基礎的な文法事項から道案内の方法、文章を作る練習などを行い、時にはディベートに近いことを行ったりもした。英会話の授業ではペアワークが基本で、友人同士でディスカッションをしたりみんなの前で即興劇を行ったりと総じて楽しかった。そしてこの授業で最も心に残っているのは、



「レストランでクレームを言う練習」というものである。2人1組でレストランを訪れた客を演じ、先生がウェ이터を演じる。そのシリアスな演技っぷりといえば、見ている側の時もまるで映画が始まったような緊張感だ。だがそのクレームの内容はどれも迷惑客そのもの。「乾杯をしたらグラスが割れた」「アルコールを頼むのに身分証明書がいるのか」「虫が入っていた」「虫が頭にとまった」等々、クレーム慣れしていない僕ら日本人が生み出すクレームはどれもトンチンカンなものばかり。それに一つ一つシリアスな表情を一切崩さず対応してくれた先生の度量には感激する。

イトンの教会からしばらく道路沿いに歩いて敷地を出ると、High Street（ハイストリート）と呼ばれる通りに出る。そこからウィンザーに行くための橋の手前までは自由時間に自分たちで行ける場所だ。イトン生がよくお菓子を買いに来るという通りで、スーパーマーケットやカフェ、古本屋、謎のモデルガンの店（怖くて入らなかった……）、さらにはイトンの制服を売っている店などがあり、何時間いても足りない。

ハイストリートでのお買い物ができるのは、時折与えられる午後の長めの自由時間である。3人以上で行動するのがルールで、一緒に行く人たちの名前と番号を先生に伝えたのちにハウスからの外出を許可される。ユニオンジャックが町中にかかけられ、花々で彩られたその街の石畳を歩いていると、心がわくわくする。最初にここを歩いた時には、「ああ、こんなところに住みたい！帰りにたくない！」と何度も隣を歩いている友人に言って、「もう？」と笑われたのを覚えている。

ウェルカムディナーでは他校の女子とも一緒に、普段男子校で生活している僕たちはどぎまぎしながらも、何とかコミュニケーションをとることができた。中にはかなり親しくなっている人たちもいたがそれはごくごく少数派に過ぎず、僕など外国人と英語でコミュニケーションをする方が数千倍楽だと思い知った。

それでもウェルカムディナーやフェアウェルディナーはゴージャスで食事もおしゃれなレストランのように、前菜からデザートまでついた満足のいくコース料理が提供された。ウェルカムディナーで噴水のそばの全面透明な食事会場に案内されたときは、これが本当に学校内の設備だと思えなかった。



普段のご飯も（日本に蔓延る英国料理に関する悪い噂に比べて）格段悪くはなかった。むしろ美味しいものも多かった。あまりイギリスならではの特別感を感じることはなかったが、十分満足のいく味であった。イトンでの食事は、もっぱら Bekynton（ベキントン）と呼ばれる食堂にて提供

される。広々とした明るいその食堂に入ると、二種類のサラダが用意されており、そのどちらかを取った後にメインをついでもらう。「Pork?」「Sauce?」などと問われるのに対し「Yes, please.」「No, thanks.」など返す。





授業3コマの内2コマが終わったところでチェンバースというおやつ休憩がある。ベキントンに集合し、クッキーと激甘なジュースを頂きながらしばし休む。ほかのクラスの友人と授業で何をしたか情報交換をしたり、他愛もない話をしたりしていると、イートンに馴染んできたことを感じる。

このベキントンでは他にも、英国の伝統的なスコーンづくりを体験した。僕たちは最後の方で生地がなくなってきたでだんだんと薄くなり、最後にはビスケットのようになったが味は良かった。酸味のあるクロテッドクリーム

と甘いイチゴジャムにつけて紅茶と食べると気分はまるで英国貴族だ。

そして小旅行（日帰り遠足）。ロンドン自然史博物館、オックスフォード、大英博物館、コヴェント・ガーデン、ミュージカル『ライオンキング』、ウィンザー城、ストーンヘンジ、ソールズベリー大聖堂……。そのどれも前日にレクチャーがあり、予習してから行けることで、より理解が深まる。

小旅行の日は朝ご飯を食べたのちにバス乗り場へと向かう。そしてバス乗り場にて先生たちから昼ごはんが詰められた紙袋を受け取る。そこにはバナナ、リンゴ、サンドウィッチ、ポテトチップス、チョコレート、ペットボトルの水が入っており、食べ盛りの男子高校生でも十分満足できる量だ。

バスに乗り込み、ロンドン中心部までの長い旅路が始まる。広々とした田園風景の中を走る。草原の中にたまにぽつぽつと白い羊が見え隠れする。そうしてしばらくすると、いきなりビル街に入る。これがロンドンの面白いところだ。



ロンドン自然史博物館は宮殿のような作りで、赤と金の門に良く映えた。正直、いずれ行く大英博物館の「前哨戦」くらいにとらえていた僕はそのあまりの壮大さに腰が抜けそうになった。中に入るとまず目に入るのが大ホールの吹き抜けの天井にかかるクジラの全身骨格だ。外観に引けを取らず内観もまるでどこかの大聖堂に來たように豪華絢爛。ただし全体的に灰色や茶色の落ち着いた装飾でセンスを感じる。アポロ計画で持ち帰られた月の石や恐竜の全身の模型、神戸の震災を紹介する展示などを見た。地震体験ができるコーナーがあったが地震を体験した

たことのない外国人向けなのかあまりに揺れが小さく、震度1～2程度だった。月の石に顔がついた謎の生物のぬいぐるみを買ってハウスの自室の棚に飾っておいた。

大英博物館は時間が足りなかったものの、教科書の中でしか見たことのないロゼッタストーンやファラオの石像、モアイ像が見られて生徒たちはみな興奮の声を上げていた。

ライオンキングは劇場自体が、天井画が施されていたりボックス席があったりと足を踏み入れれば物語の中の世界のようなであった。ミュージカルが始まるや否やその歌声やパーカッションに魅了され、舞台演出には目を見張るものがあった。

オックスフォード大学での見学は、クラスごとに分かれ、オックスフォードの現役の学生がガイドについてくれた。だがこのガイドの話があまりに早く高難易度で、何とか話の流れをつかむのがやっとだった。だがオックスフォード大学のすばらしさは十分伝わるツアーで、僕は今漠然といつかオックスフォードに短



期でも留学したいと思っている。またオックスフォード内の川では川下りを体験した。ゆったりとした川下りで、ボートに横になりながら鴨と対話を楽しんだ。



ストーンヘンジは僕の最も心に残っている場所の一つである。その目的も、製造方法もわかっていない建造物は、4500年たった今もただそこに「あった」。奇を衒わず豪華でもなく、だが歴史の重みを感じさせて。周りには羊が闊歩していた。この世界遺産の真横で草をはむ羊たちは知っているのかもしれない。時の流れの前には、人間が血眼になって研究している目的や製造技術など、大した意味など持たないことを。

ウィンザー城の衛兵交代式を見に行った日もあった。ウィンザー城の門の前の道路の橋に一行に並ぶ。しばらく待っていると鳥が上空を一斉にはばたく。これはおそらく演出ではなく偶然だがまるで鳥も英国の繁栄を祝福しているかのようであった。そしてラッパの音が聞こえてきた。遠くからだんだんと近くへ。足音が聞こえてくる。そして、ラッパを持った衛兵たちがキレイに一行をなしてやってきた。後ろには銃を持った兵たちもいる。あまりの動きのきれいさ、格好良さにみな身を乗り出して見ていた。



ウィンザー城では壁一面に剣がかけられている広間にみな大興奮。「やばいやばい」「かっこよすぎる……」。いつも以上に語彙力の欠落した我々ラ・サール生は目を輝かせて見入ってしまった。また人形の家精巧な作りやイングリッシュガーデンの美しさにうっとりとした。

その日の昼食は10ポンド紙幣が配られ各々好きなところで食べていいということで、僕を含む数名の集団はFISH & CHIPSに直行した。紙幣を払うや否や（というか何なら渡すより前に）商品が渡されるこの店はまさにファスト・フードの典型例。ウィンザー城の真下のベンチに座って食べたがあのふわふわとした白身魚と素朴なポテトは何にも代えがたい味であった。



おしてみた。あの羊皮紙のような紙にびっしりと書かれた手書きの文字に、貴族たちの思いや当時の社会を思い、目を離せずにいた。ほかにもこの大聖堂は外観も内観も細かい彫刻が施され神聖さや人類の宗教にかける熱い意志を感じた。中庭からゴシック様式の代表建築である飛び梁を見ることができて思わずシャッターを切った。

ソールズベリー大聖堂では公民の授業で嫌というほど聞くあの「マグナ・カルタ（大憲章）」の原本を見ることができた。僕はあまりの感動に列に3度も並びな



だがロンドンの各地の観光地に引けを取らないほど、イートン校の中の設備も充実していた。川でのボートレースはイートン校が所有しているドーニーレイク☞にて行われたが、それはなんとかつてのオリンピックでボート競技の会場として使われたのだとか。



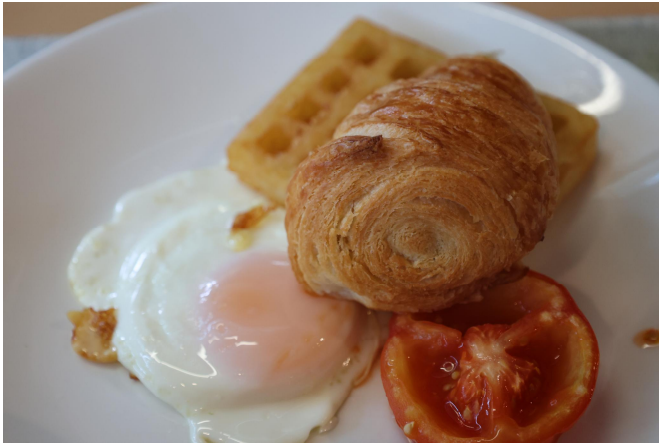
ボートレースが終わりしばらく川のそばでボール遊びやフリスビーをしたのちは川べりにある二階建ての建物の二階、ガラス張りのおしゃれなレストランでバーベキュー形式のご飯を頂いた。ハンバーガーやマカロニ、ブルーベリーのケーキにコーラなど、夢のような食事。そしてその後はディスコタイム。皆で踊り狂った。DJ がいてきらきらとしたミラーボールの光に包まれて皆で叫ぶその空間は、普段人の輪に入るのが苦手な僕でも十分楽しむことができた☞。ディスコは最終日前日のフェアウェルディナーでも楽しめることとなる。デッキからは夕日がきれいに見えた。あの景色は少なくとも僕がこれまでに、そしてこれから見る夕日のどれよりも美しいであろう。もちろん、そこには思い出というスパイスが加わっていることは明白だが。



スポーツをすることも何回もあり、バスケットボール、バドミントン、サッカー、イギリスの伝統スポーツを模したものなどがプレーできた。広々とした草原やサッカー場、さらには大きくてきれいな体育館がありスポーツ好きな生徒たちにはたまらないであろう。スポーツを普段そこまで好まない僕も十分楽しむことが出来た。



このイートン校サマースクールの面白いところは、異国の地という本来「非日常」であるはずの場所で「日常」を体験できることだろう☞。朝起きて（時には寝坊して先生に起こされて）、眠い目をこすりつつ一階のミーティング・ルームに集まり、今日の予定を聞いて、朝食を食べにベキントンに行く☞。その後学用品を持って学校に行き授業を受ける。たまにショートトリップにいったりするものの、夜には帰ってきて晩御飯を食べて部屋に戻って就寝する。こんなある意味「日常」を、高校生のうちに海外で体験できるという



のはなかなかない貴重な経験だろう。

ウィンザーで最後の遠出しをし、お金を使い切るつもりで買い物をした後、ハイストリートを歩いていて、この景色も最後ののだから目に焼き付けておこうと思った。だがどうだろう。最初にはわくわくしていたこの風景も、今となってはもはや「日常」と化していたのである。「もう慣れちゃったな」、そう友人と語りつつもこの地に手を振ることを未だ寂しく、耐えがたく思っている自分がいる。

またサマースクールの終盤には「タレントショー」と呼ばれるみんなが出し物をする場があり、絵を描

く人、歌を歌う人、踊る人、ピアノを弾く人、英語劇をする人など、それぞれの新たな一面が垣間見える楽しい場所となった。最後に全員で OASIS の「Don't look back in anger」を歌った。肩を組み、横に揺れながら歌う。来たときは仲のいいグループで固まっていた我々にもかかわらず、あまりしゃべったことのない人たちとも肩を組み、全員で大合唱。「So, Sally can't wait.....」と歌っていて、そのどこか哀しみを含んだメロディーにこの終わりゆく新たな日常を思い急に寂しくなった。だがその気持ちをかき消すためにより大きな声で歌う。天井の高いホール一面に、僕らの声が響き渡る。



そうして迎えた最終日。僕は前日の夜ほとんど徹夜で入るはずもない膨大な荷物をトランクに詰め込むという作業をしたため大変眠く少し具合も悪かった。出発前に国際線に乗れる重量を超えていないかどうかイートンの先生たちが簡易重量計でチェックしてくれるのだが、僕の荷物はその重量を優に超えていて僕の徹夜の努力はあえなく無駄となり、荷物詰め直しと相成った。

それでも何とか荷物を詰め込み、バスに乗り込む。そうしてやっと、このもはや日常となってしまうイートンでの生活が終わりを迎えるのだと実感した。数名の先生たちは空港までついてきてくれるものの大学生スタッフや一部の先生方とはここで別れとなる。一期一会。そんな言葉が浮かんだ。ここで出会った先生たちやスタッフたち。一緒にご飯を食べ、時に笑い、言語の壁や国境など感じさせないほどに親しくなったと思っていた彼らとも、このバスが一度発進して視界から消えれば、もうこれから会うことはないかもしれない。きっと人生における出会いなんてそんなものだろう。だけど、せめてここが帰れる場所でありたい。もはやすでにここは異国の地ではなく、僕たちの「第二の故郷」となっていたのだ。

また来たい。そう思った。強く。ちょうど飛行機のエコノミークラスの座席で、座席に据え付けられたテレビ画面で機外カメラの映像を見ていた時だったと思う。来たい、ではなく、帰りたい、かもしれない。日本に帰って日常に順化して、少し疲れた時も、友人と話しているときも、昼飯を食べているときも。彼らの時間は進んでいて、つながっていて、帰れる場所となる。そんな場所を、人は故郷と呼ぶのではなかろうか。

飛行機が飛び去って行く。ヒースローを過ぎ、ウィンザーを、ソールズベリーを、私たちのいた街々の上空を。来たときは初めての地として、一つの「イギリス」という未知の場所として見ていたこの景色。だがもう僕は、あの家々の一つ一つに人々の人生があることを知っている。一緒に笑いあったイートンの先生も、

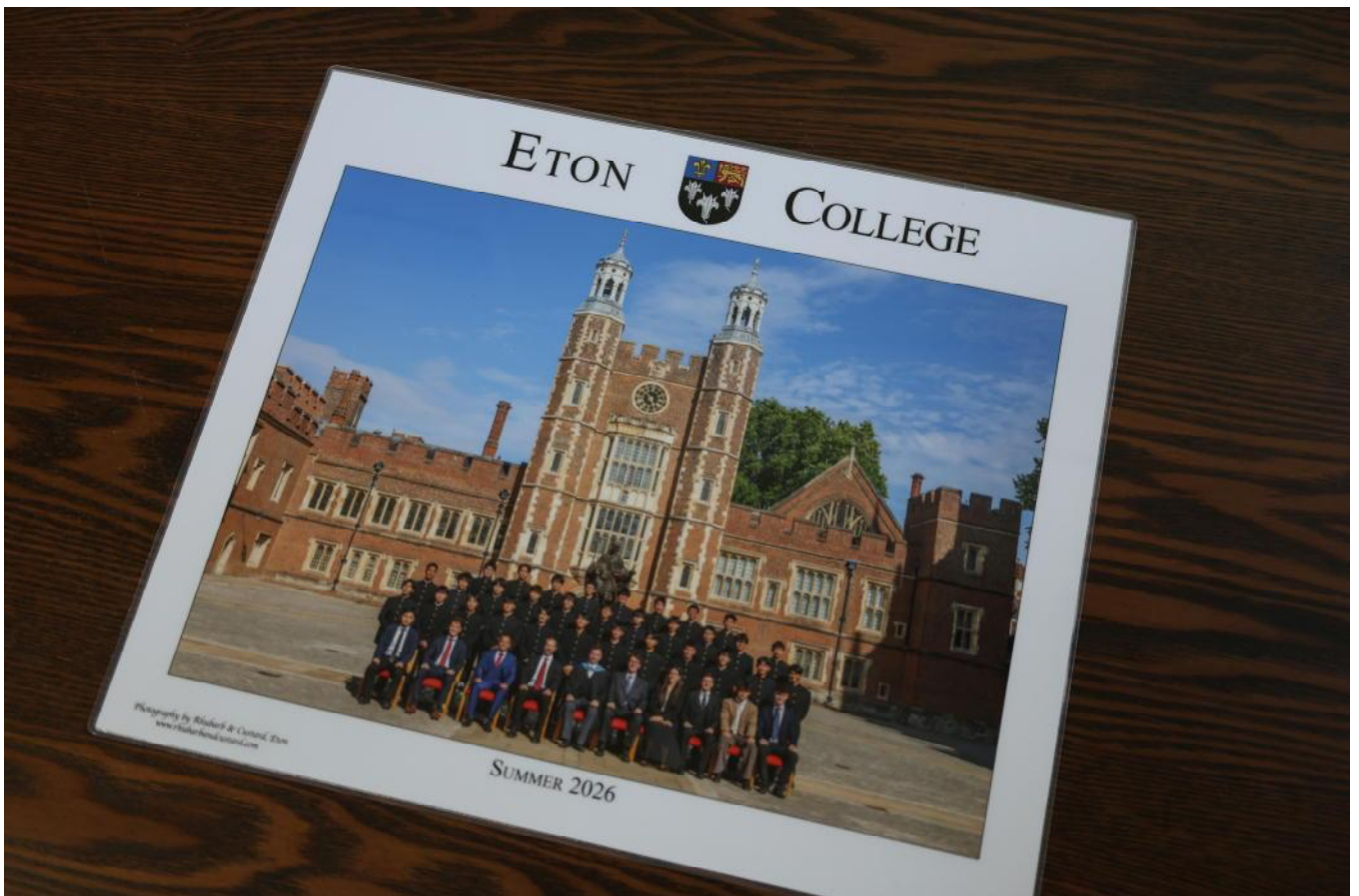


忘れがちだが、僕たちは違う国の人々のことを、その人たちに会うまでは本当の意味で知らない。「外国人差別はよくない」「民族を超えた共生」。そんなことを唱えていても、彼らに会うまで彼らのことを認識すらしていない。共感しあって、本当の意味で共生していくには会うしかない。違う習慣を、違う文化を、違う食生活を、違う民族を知って、そしてそんな中で一緒に笑いあえる彼らのことを知る。同じ人間であることを知る。今まで本や動画の中だけで見ていたイギリスの漠然としたイメージを、僕が今回鮮明にしたように。

日本に帰ってからも時折彼らのことを不意に思うことがある。僕の勉強机の端で今もイギリス時間を刻む懐中時計が思い出させてくれる。

僕の第二の故郷の、彼らのことを。

ご飯を笑顔で渡してくれたベキントンの調理師の人も、日本語を頑張って覚えようとしていた学生のスタッフも、川べりで赤ちゃんを抱っこして笑いかけてきたおじさんも、路上で歌を歌っていたおじさんも、会計の時に ”How are you?” と気さくに話しかけてきた店員さんも。今頃はもう夕食を食べているだろうか。家族と一緒にいるかもしれないし、ピアノを弾いているかもしれないし、シャワーに入っているかもしれない。彼ら一人一人の生活が、今僕の足元にある。



以下は、参加した別の生徒や同行した先生から提供された写真です。

